

## 予備合宿

1年 鈴木真人

7月13日の朝とわか未明、部室に集まり、予備合宿前夜班はAM5:02の目黒線の始発に乗り込んだ。みんな寝不足でもうフラフラで大岡山までいくのがや、とという様子でとこも三國山までいける状態ではなかった。

眼の目をこすりながら、とのこと三峰口についた。三峰口で買った物としなると三國山を登りはじめたら他に買う所がないというミヅPな話を聞いていたためにそこで夕食の買っだしをしたさあ、いよいよ出発である。天気は上り、雨の心配もなく軽い気持ちでペダルをふんぞい、た。中双葉で昼食をとることにした。川に降りて顔を洗った。水が冷たくて、とてもいい気持ちだ。下宿している人々の昼食はというと、前日部室で、大塚さん佐藤さん花岸さんと私が作、たところの味の保障はない、多分食べられると思われおにぎり、実際食べるのができずおが、た。もし食べられなかつたら三國山の途中でダウンスしていったかもしぬる。中津川に沿って走るのはまだ勾配が緩やかである、たのに、中津川と井ヨナラしたとたんに急にきつくなる、とき中津川林道にはいっていった私たちは寝不足からの疲れがど、とどきた、もうあとはだめだった、足が思うように動いてくれない、押して登るしか方法がなかった、そんななかでもトップを行くのが大塚さん、カのみぞグイグイと登って行くのだ、その後から小野さん、佐藤さ

鈴木さん小柳さん花房さんと私が自転車に乗、たり降りて押し  
たりしながら読んでいた。大きく遅れて高野くん高橋くん金井  
くん西口くん 途中で私が下から登、てきた自動車に遅れこくる  
彼らについで聞いたところ、相当下のオゾ道のの上に大の空にな、  
ていたというからとともすぐには来そうもなかった。その後私は  
花房くんと共に押し登、ていったのだが、山腹に沿、ていく道  
はくねくねと登、ていてまだかまだかといやにやっこくるくらい  
だ。だが目の前に山頂を切りた、た三田峠が見えた時はもう  
うれしくてたまらなかった。峠に着いた時、その峠を吹きぬける  
突風が流れて一瞬のうちに吹き飛ばしてくれたようであった。峠  
からみた下界の美しさはすばらしい。さぞであった。と近くな  
る。たださうか。あたりは暗くなりかけてきたころ、全員が峠に登  
りついた。峠を吹きぬける風は強く寒い。このころ峠をくだとい  
うか。時代劇にぞも出てきそうさ峠であった。私にと、これはサイ  
フリニガを通し、ての初め、ての峠だけに心に残るものはずし、と重  
みがあった。海拔1745m、三峠口からは標高差があまりない  
かもしれぬが、よく押し登、て来たものだと思った。

記念撮影をすませるといよいよ下りだ。登、てくる時とはうらは  
らに向こう側はどんよりと雲がた山こめている。下、ていく途中  
ではハプニガが繰出した。ハプニフの大走りなのだ。私はハプ  
ニフしたかと思うと上のオゾは佐藤さんが、下では高橋くん高野く

ん西口くんがパニフをしろいさるどはないか。パニフ修理を終えろ下まで降りろみると名取さんが遅い遅いといて待っていた。名取さんと計画通り合流できたものの時間が時間である。あたりはまっ暗になつていた。山からテントをばって食事を作るなど困難はわかっていたがそうするしめしかたがないためにバッテリーライトでの作業を始めることにした。テントをばってしていると重大なミスが明らかになった。ポールを一緒にけ忘れてきたのだ。応急処置として適當な枝を代用したもの誰がこのテントで寝るかというはたきき問題がのこされた。存人とか夕食(カレーライス)を済ませるビールを乾杯といきたいところだが、夕食を腹いっぱい食べたためにビールのはいる余地がない。だがそこは根性、ビールを必ず飲んだ。とにかく寝不足で出てきたものだから今日一日流した疲れたの一言ではなく連発であった。空を見上げると矢ほどの雲がなく、空一面星をいっぱいだ。まるで童話の世界に出てくるような空だ。山に四オモかこまのこいて空だけが曇り上がった。こいるみたいで今まで見た空とは一風変わったところかより魅せられたようであった。

鳥のさえずりを聞きながら起床である。朝日が土人さんと輝きすがすがしい朝だ。川の澄たい水で顔を洗うと身のふきしまる思いた。今日は麦草峠の頂上までの予定である。果たして無事に麦草峠まで行けるかどうか。

出発しこそもなくまたまたパニフである。高野くくが前日のパニフの時にリムフランプがちぎれしまふ、たためにリムフランプなしで走っていた。そのためじり道にはいった途端にパニフしたのであった。その次には小柳さんのパニフである。これもなかなかめんどうくさいことになつた。たさしく(著者はこのことに関知していなかった)自転車屋を探して直してもらつた。その後千曲川を横切り小海線に沿つて海へ出ようとするところ不幸にも小野さんが下りのコーナーで転倒してトウクリップがはずれなつた。たためにけがをしてしまった。村役場を診てもらつたところ競走は無理だということと論行して帰ることになつた。事故で一人抜けてしまふ人の悲しいことである。みんもの顔が心もち暗くなつた気がする。とにかく昼食を済ませ気を取り直して出発することにした。いよいよ妻草峠へのチャレである。R.16を北上して八千穂村まで来た。大石川の橋のところまできこ名取さんや大塚さんがどこぞ左折していかを協議していたがもう少し先だろうといつて走つた。数キロいつたところ地元の人に聞いたとなしと来すぎていた。どこまでいけばよいのかと思つた。たさ。さきほどの橋のところまでいってしまった。ここで最初から曲がればよかったのだ。ショックだったと同時に液水がドーンとどてきた。今日はあまり走らなかつたけれど、いろいろ守つてあつた。もう日が暮ちかけるといふことでも妻草峠まで行ける時間なぞなか

ったのがキャンプ地を探ることにした。1000m地帯まで行っ  
たところぐらいの大石村で、所工場の庭を借りることにした。さ  
っそくテントを張、2食事の仕度をしていると、スーパー・カー  
がや、2来た。実はスーパーマーケットの出張販売の車をのどあ  
る。スーパー・カーに乗り込んどすいか。トマトなどを買、てさ  
あみしだ、みしだ、この日のみしは昨日のあわただししか、たのと  
は逆に余裕をもって食べることができたのだ。じっくり味わうこ  
とができた。夕食後、みんなが雑談しているとホテルがちらほら  
と飛んできた。子供心にかえったようにホテルを追いかける。あ  
たりを見回すと山には木がみい茂、ていて闇の中で月の光をまび  
て不気味に輝やいてる。中原中世の詩にどきそな情景があ  
ると思、た。

較に悩まされ、熟睡があまりできなかった。だがすがすがしい  
朝だ。テントをはい出して見たらび、くり。昨夜汚れたままにし  
ておいた食器がきれいにな、ている。どがなめていったらしい。  
こから麦草峠まで上りのみ、を協は許されな。私は1200  
mぐらいまで登、たところど足が急に軽くな、てきた。よし今の  
うちに登ゆるだけ登ろうと思、てぐいぐいと登、てい、た。登り  
はマイペースどいくのが最もよいと言われたのだ。私は行けるよ  
ろまで行、てみようとしていた。麦草峠は100mごとに標識が  
あ、てきれを見せからいくとなぜか疲れな。日ざしが強く汗が

したり落ちたが気にせずにバザルをふんでいった。と行くうちに麦草峠に着いたのだが、あっという間に着いてしまったような気がした。麦草峠は峠といっても三国峠とはまったく違い、見はらしはよくなるいがまた三国峠とは別な魅力を秘めているように思われた。こゝも多分自分の力だけで登ってまたからであるのか、2185mという標高は登る者にとっても魅力ではないだろうか。峠だけあってさすがに涼しいというか寒いくらいだ。なぜか三国峠の時のようにまた曇ってしまった。雨が降ってきそうだが、急いで下るなければならぬ。とにかく下りは寒いので防寒具に身をまたぬいでお出発。

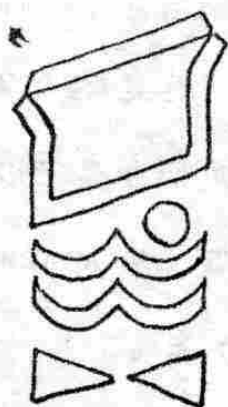
麦草の下りはヘアピニが多い。佐藤さんがすごいスピードで私の横を通り抜けていった。速いなと思っといううらに見えなくなっってしまった。私は時のブレーキを踏むから慎重に降りていった。と突然佐藤さんの自転車が見えたかと思うと前輪がぐにゅと曲がっている。ヘアピニカーブでセンターラインの上のりすべって左側のガロップにぶつかったらしい。けがはないしたことなかったが、自転車の方がどうにもしかたがない感じ。他の連中を待ったところなかなか来ない。もしやと事故っているのではないかと心配していたところ、案の上、金井が転倒してヘッドスライディングをするし、西口はガードレールと接触していた。金井くんのオはみじなどにかすり傷を負っていた。西口くんはうい



ニブレーカーが破損していた。名取さんなどが、佐藤さんのリムをえんだりけったり？しているうちになんとか走れる状態になったのであと茅野までの数十キロを急ぐことになった。あと数十キロというところどついに雨が降り出してしまった。空を見上げてもそう簡単にはやみそうもない。しかたなく走りつづけることにした。金井くんは雨が傷にしみて痛そうであった。

ともかくも茅野駅に着いた。雨の中での輪行である。育中に雨が降ちてきて冷たかった。

このツーリニブは名前の通り合宿を前提する予備的なものである。私たちの班はいろいろなることが起こり、なかには不幸なこともあったがみんな楽しく過ごせたと思えた。また地元の人々には1日目に店をレタスさわけていただいたし、2日目には近所の人からゆめぼしを差し入れしてくれた。サイクリングを通して地元の人々にふれあえることができたことがとてもうれしかった。そして私自身三國峠、麦草峠を登り、その峠が好まらなくなってしまった。あの登り終えた後の満足感がなんとも言えないのである。



Mister  
Donut